

材木を担ぎながら 其の七
茶道はじめての一步 第一回
—古希の手習いの勧め—

きよ ほうへん
清 方扁

齢70歳を幾つか過ぎると体力、腕力、共に衰えて、材木を担ぐのも四寸土台でフラフラしているようではもう駄目ですね。ゴルフも数年前に連載された「ゴルフが好きで下手くそで」(平成27年5月号から連載)というエッセイにでも登場しそうなヘボですが、今や上手とか下手とかでなく18ホール回る体力に自信が無くなってきました。今年は「年賀状納め」「ゴルフ打ち納め」「材木担ぎ納め」の年になりそうです。でもまだまだ向上心のある私は何を思ったのか70過ぎてから月一回ほど「茶道教室」に通いはじめたんです。

そんな初心者の私が今回は自分の勉強も兼ねて、読者諸兄に茶道の基本の基を伝授？しようとしています。さて私が説く「茶道」を「信じるか信じないか、それはあなた次第です」

第一章 お菓子の頂き方

ここでは正式な茶会や茶事でのマナーでは無く料亭や旅行先の旅館やお庭での野点で出される抹茶のいただき方とご理解下さい。まず大抵、抹茶にはお菓子が付いてきます。**お茶とお菓子が出されましたら、まずお菓子から頂いて下さい。**一口で食べられないような干菓子や饅頭は懐紙に乗っていますから懐紙ごと手に乗せてから手で割って食べて下さい。決して歯で割ったりかぶりついたりしてはいけません。生菓子の時は黒文字(楊枝)がついてきますから、それで切って食べて下さい。そして**お菓子は全部食べてからお茶をいただきます。**ここがおやつのお茶とおせんべいを食べるのと違うところです。



お茶を習っている人は皆こんな美人ばかり！



お菓子は一口大に切ってから食べてください。

第二章 抹茶(薄茶)の頂き方

まずお茶碗を右手で取り上げ、左手のひらの中心あたりに乗せる。指の先端や逆に手のひらの奥のほうに乗せないこと。そして茶碗の縁には触らず胸の辺りで写真のように持ってください。ここでお茶を点ててくれた方に感謝を込めて軽く頭を下げながら茶碗の正面を避けて、茶碗を時計回りに90度位回してください。そして姿勢を正して飲みます。**何口でも構いませんので飲み切ってください。**よく「三口

半で飲みましょう」と言われますが、個人差がありますので自分のペースで召し上がったほうがより美味しく味わえると思います。ここで肝心なことはお茶を飲み切ることです。そのためには**最後の一口は「吸い切り」と言って音を立てて飲み切ってください**。これが意外と難しい、蕎麦をすすするようなズルズルではダメですし、パフォーマンスで大きな音でも下品です。お茶を点ててくれた方に美味しく最後の一滴まで頂きましたという感謝の心で吸い切ってください。そして右手で飲み口の辺りを一拭きしたら、今度は時計と逆回して正面を戻します。そして「おいしくいただきました」とお礼を言きましょう。またどんなロケーションであるかはわきまえなくてはなりません、もしも名旅館やそれなりの席でしたら、茶碗も吟味されておるはずですから、亭主（旅館の主人）も茶碗や茶道具に興味を持ってもらいたいです。そこで分からないながらもお茶碗を鑑賞してみてください。**お茶碗の鑑賞（拝見）は茶碗を持ち上げず、まず身体を屈めて写真のような姿勢でみます**。その時はお茶碗のデザインは勿論、裏側「高台」を拝見しても失礼になるどころかよくぞ「高台」まで見て頂けたと亭主は大喜びなのです。そこで先程申したように、お茶が残っていると裏側を見る事が出来ませんのでご注意ください。そしてよく分からなくても「春らしい絵柄ですね」とか「持った重さ、大きさがしっくりして美味しく頂きました」とか率直な気持ちで褒めてください。お茶を点ててくれた方が喜ぶこと請け合いです。



正しい茶碗の持ち方



茶碗の拝見は慎重に

以上、何度も申しますが、これまでお話してきた事は正式な茶会のマナーではありませんが、これだけ憶えておきますと抹茶を出されても気後れすることなくお茶を楽しめると思いますよ。今はコロナ禍で開催されていないと思いますが、抹茶を点ててくれるところは各所にあります。日本橋の高島屋や三越など多くのデパートの美術品の催し場などでよく模擬茶席が開催されますし、足を延ばして横浜の三溪園や、さらに鎌倉まで行けば多くの寺院で抹茶をいただけます。でも度を過ぎると胃腸に毒ですからお気をつけください。

今回もなんの興味もない方々には退屈な話だったと思いますが、茶道は日本文化の総合芸術です。次回はお茶碗の種類や床の間の掛け軸の基本？について書いてみようと思っていますので、宜しくお付き合いください。

今回の拙文は私が習い始めたばかりの裏千家茶道教室での自分なりの理解ですので、全くの見当はずれな箇所が多々ありまじょうが、間違いを指摘され、恥をかくのも上達の一手と信じて、敢えて筆を取ったもので、参考資料などは一切無く、文章内容の責任は全て私が負うものです。